

# 日中戦争以降の中国占領地における食糧需給

平 井 廣 一

# 日中戦争以降の中国占領地における食糧需給

平井 廣一

## 目次

- はじめに
- 1. 米穀
- 2. 小麦・小麦粉・雑穀
- おわりに

## はじめに

本稿は、いわゆる「大東亜共栄圏」の経済的実態を考察するための準備作業として、中国占領地における穀物需給の動向を、貿易と国内需給の側面から考察する。

前稿<sup>(1)</sup>では、華北分離工作以降、日本軍によって次々と設立される傀儡政権の財政構造を検討した。そこでは、戦争末期の国民政府(南京政権)の財政において、食糧対策に関する経費が巨額を占めていたことが明らかになった。

そこで本稿では、日中戦争前後からアジア太平洋戦争末期の中国占領地における食糧の需給状況を、米穀と小麦・小麦粉、そして雑穀について検討する。いうまでもなく、戦争の遂行において、石油や鉱物資源と並んで最も重要な経済資源は食糧であり、とりわけ日本は太平洋戦争時の食糧危機を背景に、中国

占領地に展開する現地軍は軍需米を中心とする食糧を中国内で調達する必要に迫られた。そのことは、中国のそれまでの食糧の流通を攪乱し、深刻な食糧危機を発生させた。本稿では、日中戦争を契機に中国の食糧需給のあり方がどのように変化したのかを、米穀、小麦・小麦粉、雑穀の輸移出入、及び中国各地における需給の実態を明らかにすることによって検討してみたい<sup>(2)</sup>。

## 1. 米穀

まず表1-1~3によって、日中戦争期前後から太平洋戦争前までの中国の米穀輸出入量とその輸出入地域を観察しよう。表1-1によれば、輸出は北支、中支、南支ともほとんどなく、輸入が圧倒的である(北支、中支、南支には「」をつけるべきであるが、省略する)。中国米(中支米)の輸出先は表1-3のように関東州が大部分であるが、実際は満州への輸出であろう。

これに対して輸入は、総量は1935年まで100万トン台を維持していたが、翌36年から30万トン台に急減し、この傾向は日中戦争後も続いていく。ただ1940年には65万トンに回復する。

表1-1 米穀の輸出入量

(1,000トン)

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
北支	輸出	0	-	0	0	0	-	0	1	-
	輸入	108	51	42	22	6	2	103 (25.4)	148 (46.3)	168 (25.9)
中支	輸出	0	5	5	2	24	20	0	4	4
	輸入	355	56	115	711	17	36	64 (15.8)	45 (14.1)	401 (61.8)
南支	輸出	0	0	1	3	2	0	0	2	0
	輸入	883 (65.6)	1,187 (91.7)	613 (79.5)	562 (43.4)	285 (91.9)	307 (89.0)	238 (58.6)	125 (39.1)	83 (12.8)
計	輸出	0	5	6	5	26	20	0	7	4
	輸入	1,347(100.0)	1,295(100.0)	771(100.0)	1,296(100.0)	310(100.0)	345(100.0)	406(100.0)	320(100.0)	649(100.0)

キーワード：日中戦争、穀物需給、中国占領地

表1-2 米穀の地域別輸入量

(1,000トン)

	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
仏印	454 (33.7)	566 (43.7)	342 (44.4)	753 (58.1)	113 (36.5)	183 (53.0)	104 (25.6)	97 (30.3)	389 (59.9)
タイ	386 (28.7)	456 (35.2)	345 (44.7)	343 (26.5)	176 (56.8)	110 (31.9)	184 (45.3)	135 (42.2)	177 (27.3)
ビルマ	427 (31.7)	253 (19.5)	64 (8.3)	192 (14.8)	19 (6.1)	50 (14.5)	75 (18.5)	16 (5.0)	43 (6.6)
香港	68	11	13	1	0	0	11 (2.7)	6 (1.9)	3 (0.5)
日本	2	1	1	1	0	0	15 (3.7)	8 (2.5)	27 (4.2)
台湾	1	-	-	-	-	-	0 (0.0)	4 (1.3)	2 (0.3)
朝鮮	0	0	0	2	0	0	8 (2.0)	49 (15.3)	6 (0.9)
関東州	0	1	2	0	0	0	3 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
シンガポール	3	1	1	-	-	-	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他とも計	1,347(100.0)	1,295(100.0)	771(100.0)	1,296(100.0)	310(100.0)	345(100.0)	406(100.0)	320(100.0)	649(100.0)

表1-3 米穀の地域別輸出量

(1,000トン)

	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
日本	0	0	0	0	0	0	0	0	0
朝鮮	0	0	0	-	-	-	0	0	1
台湾	0	-	-	-	-	-	-	2	3
関東州	0	4	4	2	23	19	0	0	0
香港	0	1	1	3	2	1	0	0	0
その他とも計	1	5	6	5	25	20	0	7	5

出所：「米移動高調」(原資料は「海関中外貿易統計」)

『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係』第3

巻 アジア歴史資料センター B08060396900)

(備考)

北支や中支などの語は、本来「」を付すべきであるが、省略した。

(原表 注)

地域的分類=北支：河北・山東・山西・甘肅・陝西省

中支：江蘇・安徽・河南・湖北・湖南・江西・四川省

南支：福建・広東・広西・貴州・雲南省

輸入先を地域別にみると、1937年まで南支が大部分を占めていたが、38年以降には北支に15万トン、中支に4万トン～40万トンもの輸入がみられ、あきらかに日中戦争の勃発を契機に、とりわけ北支へ外米輸入が急増することを示している。

外米の輸入先は(表1-2)、仏印とタイ、及びビルマであり、なかでも仏印米とタイ米が多い。しかし1938年になると、これらの3地域に加えて、日本や朝鮮がある程度の比率を占めるようになる。

こうした占領地における米穀輸入の動向をみれば、日中戦争以前の中国は、特に南支で、仏印米とタイ米、そしてビルマ米に依存していたが、戦争が始まるとそれ以前のようにこれらの外米に依存できなくなることを示している。しかしその一方で、それまで外米の輸入がほとんど見られなかった北支で輸入が急増するとともに、少量ながらも日本や朝鮮からの米穀輸入が始まる。

総じて中国は、満州向けを除いて米穀をほとんど輸出できず、東南アジアや朝鮮のように日本に対する主要な食糧供給基地とはなりえなかった。また日中戦争が始まると外米の輸入は激減し、日本や朝鮮からある程度の米穀輸入が始まる。このことは、戦時において米穀需給が逼迫し、朝鮮米や外米を大量に輸入しなければならなくなった日本が、中国占領地(後述するように日本人の食糧用)に対しても米穀の供給を強いられていくことを意味している。

表1-1及び表1-2は、外国からの米穀輸入を示したものであるが、中国国内の地域別の移出入を日中戦争以前の1933～36年に限って示したのが表2である。まず表2の下段の「(参考)外米輸入高」の合計を表1-1及び表1-2の輸入の合計と比較すると、中支と南支の輸入量に若干の相違があるが、総量は数値が合致しており、表2の上段と中段に示された中国国内の移出入量は、表1-1と

表2 地域別米穀移出入量 (1,000トン)

	1933	1934	1935	1936
「支那米」移入高	785	418	353	701
北支	221	80	113	179
中支	94	169	167	276
南支	469	177	72	246
「支那米」移出高	803	440	381	723
北支	1	0	0	0
中支 (A)	800	426	330	645
中支3省 生産量(B)	12,431	7,722	...	12,202
(A)/(B)%	6.4	5.5	...	5.3
南支	0	12	49	49
(参考) 外米輸入高	1,295	771	1,296	310
北支	51	42	22	6
中支	56	61	603	12
南支	1,187	665	670	290

出所：興亜院華中連絡部「中支ニ於ケル米、小麦及小麦粉需給状況ニ関スル資料 昭和14年11月」

(「大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係 第1巻」 B08060395200)

(原表注)

三井物産調査による。

(備考)

「北支」とは、秦皇島・天津・龍口・芝罘・威海衛・青島を、「中支」とは、上海・南京・重慶・杭州・漢口・九江・万県・宜昌等を、「南支」とは、寧波・温州・福州・厦門等の各貿易港をさす。

また「中支3省」とは、江蘇・浙江・安徽の各省を指し、1935年は原表で欠落。

表3 上海港の米穀輸入 (1,000トン)

	1935	1936	1937	1938	1939
輸出量	1	14	12	1	2
うち関東州	1	14	11	0	1
輸入量	202	2	18	38	2
うち仏印	128	1	18	38	-
うちタイ	19	0	0	0	2

出所：興亜院華中連絡部「中支ニ於ケル米、小麦及小麦粉需給状況ニ関スル資料 昭和14年11月」

(「大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係 第1巻」 B08060395200)

表4 輸送種類別上海米輸移出数量

(1,000トン)

	輸移入	輸移出
対外国	97	6
内陸河川經由	158	...
鉄道	20	5
水陸連絡	10	0
再移出入	79	92
その他	55	...
計	419	103

出所：興亜院華中連絡部「中支ニ於ケル米、小麦及小麦粉需給状況ニ関スル資料 昭和14年11月」

(「大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係 第1巻」 B08060395200)

(備考)

①満鉄調査によるもので、1930年代半ばの数値と推測できる。

②原表の単位は担で、1担=60kgに換算した。

表1-2の輸出入量に対応するものとして利用することができる。

同表によれば、移出及び移入量は両方とも35万トンから80万トンと幅があるが、この量は表1-2の外米輸入量と比較してもかなりの量である。移出は中支が圧倒的で、北支は皆無であるのに対して、移入は北支、中支、南支のすべての地域で行なわれている。しかも移出量はほぼ同じであるから、中支米が各地へ移出されていると推定でき、なかでも中支内での取引、そして中支から南支への移出が多い。これら中支の移出量を同地域の米穀生産の中心である江蘇・浙江・安徽3省の生産量と比較すると、移出量は生産量のほぼ5%となっている。

一方、中支米の北支への移出は中支や南支向に比較すると相対的に少ないが、1936年には北支の移入が増加し、米穀の移入は3地域が肩を並べるようになる。この中支米の北支移出は、表2の1936年以降は、37年49千トン、38年40千トン、39年(1月~10月)50千トンと激減する<sup>(3)</sup>。そしてその減少を補ったのが表1-1にあるように外米と、日本・朝鮮米であった。

このように、中支は米穀移出の中心地であるが、中支で最大の貿易港である上海港の米穀の輸出入量と上海米の輸送経路を見たのが表3と表4である。まず表3は、表1-1及び表1-2における中支の米穀の輸出入の動向を上海港の数値と比較するために掲げたものであり、同表によれば、1936・37年度に関東州(満州向け)に約1万トンの米穀輸出がみられ、その量は表1-3の関東州向けの米穀輸出に対応している。また輸入においても、仏印・タイ米の輸入は1936年から激減しており、こうした現象は、表1-1の中支の米穀輸入量及び表1-2における仏印・タイ米の輸入の激減に対応している。

続いて表4は上海に出回る米穀の輸出入と移出入のルートを示す。外米の輸入よりも内

陸の河川を利用した移入米の方が多く、再移出入もかなりの量に上っている。おそらく上海という都市の消費需要においては、外米の需要とともに、近郊の農村米が水運で大量に上海に移入されているのであろう。

次に表1-1~3で示された1940年以降、すなわちアジア太平洋戦争期における外米の輸入はどうなるのか。表5は、1942・43年の外米(仏印米とタイ米)の輸入量を表す。42

年の外米輸入量は38万4千トンで、表1-1の1940年度の輸入量64万9千トンの約60%に落ち込み、翌43年の輸入量は26万7千トンと前年の30%減となっている。さらに43年については外米の銘柄が判明するので、その量と表1-1を比較すると、タイ米の落ち込みが激しいことがわかる。結局、1940年から43年の3年間で仏印米とタイ米の輸入はそれぞれ約55%、15%に減少したことになる。

外米の輸入先では、南支が最大で、上海はその8割程度である。北支の輸入はこの2地域に比較するとかなり少ない。南支が仏印米の最大の輸入先であるのは、おそらく船舶輸送が逼迫して仏印米を陸上輸送するしかなかったのであろう。アジア太平洋戦争の進展とともに、中国への外米輸入はますます厳しさを増していくのである。

表6は戦争末期の1944・45年度における北・中支及び蒙疆への米穀の輸出入、移出入計画を示す。1944年度の北支は、南方米の輸入がわずか8千トン計画されているのみで、日本からの輸入量のほうが多い。またそれまで中国内の北支と南支向けの米穀供給地域であった中支の輸移出も実質的には皆無である。45年度になると、北支において44年度と同量の輸入が計画されているのみである。戦争末期に至って、中国は外米の輸入はおろか、それまでの中支から北支への米穀供給も不可能となり、日本から北支向けにわずかの米穀供給を受けるにとどまった。

表5 各地域の外米輸入量 (1,000トン)

	1942	1943		
		仏印米	タイ米	計
北支	70	28	5	33
上海	200	82	4	86
南支	114	104	18	122
(大連)	...	17	6	23
計	384	232	34	267

出所:「昭和17年度支那食糧対策要綱」「昭和18年度支那向外米輸入数量」「銘柄別輸入数量」

(「大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国经济政策関係雑件食糧需給対策関係」第2巻 B08060396200)

(備考)

年度は暦年(1月~12月)

南支は、原表の厦門、汕頭、香港、澳門、広東、海南島の計。1942年の「上海」は原表では「中支」。

表6 戦争末期の米穀輸出入

(1,000トン)

		1944		1945	
		輸移出	輸移入	輸移出	輸移入
北支	輸移出	-	-	-	-
	輸移入	30	(日本22 南方8)	29	...
中支	輸移出	0	-	-	-
	輸移入	-	-	-	-

出所:「19年度華北食糧需給計画」「20年度北支食糧需給計画」「19年度中支食糧需給計画」「20年度中支食糧需給計画」「19年度蒙疆食糧需給計画」「20年度蒙疆食糧需給計画」

(「大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国经济政策関係雑件食糧需給対策関係」第3巻 B08060396700 B08060396800)

表7 華北3省の米穀生産と輸移入 1934-1943 (1,000トン)

	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943
生産量	177	113	129	140	140	70	99	114	67	67
輸入量	42	22(2)	6	2	103	145(58)	168	...	70	33
移入量	81	113	178	49	50	...	...	...	...	...
計	300	248	313	191	293	265				

出所:1934-39年度は生産、輸移入とも「各国ニ於ケル農産物関係雑件 米穀ノ部 華北ニ於ケル米穀調査」(B06050462300)、1940・41年度の生産量は、甲第1800部隊・興亜院華北連絡部「昭和16年度第2次 北支農産物収穫高予想調査報告」(A06033010100)、42・43年度の生産量は、甲第1800部隊・在北京大日本帝国大使館「昭和18年度第3次 華北農産物収穫高予想調査報告」(B10070234600)。1940年度の輸入量は表1-1、42・43年度は表5による。

(備考)

1935・39年度の括弧内は日本からの輸入量を示す。

表 8 日中戦争前後の華北の米穀消費量

(1,000トン)

	1935	1939
日本人人口 (千人)	41	126
中国人人口 (千人)	76,184	76,184
日本人消費量	6.7	20.7
中国人消費量	281.6	238.2
消費量 計	287	258
日本人 1人あたり消費量 (kg)	164	164
中国人 1人あたり消費量 (kg)	3.7	2.7
日本人 飯米	6.3	19.9
日本人酒造米	0.4	0.8
日本人消費計	6.7	20.7
日本からの輸入米	2.8	58.3
中国人飯米	214.4	170.9
中国人菓子	52.5	52.5
その他種子	14.7	14.7
中国人消費計	281.6	238.2

出所：「各国ニ於ケル農産物関係雑件 米穀ノ部 華北ニ於ケル米穀調査」(B06050462300)

表 9 華北の主要農産物生産量 (1,000トン)

	1940	1941	1944
小麦	5,631	5,400	5,260
高粱	2,673	3,280	2,933
粟	3,479	4,200	4,134
玉蜀黍	1,961	2,430	2,284
水稻	416	…	95
陸稻	39	…	…
棉花	194	…	…

出所：1940年度は、興亜院經濟部第5課「昭和15年度ニ於ケル北支主要農産物作況」(「大東亜戦争中の帝国の対中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係」第1巻 B08060395300)、1941年度は、在北京大日本帝国大使館「華北農産概況 第1部 昭和18年2月」(同第2巻 B08060396000)、1944年度は、大東亜省支那事務局農林課「各地域別本年度取買計画並実績表 (11月末現在)」(同 第3巻 B08060396600)

それでは、こうした中国における米穀の調達は、国内生産、あるいは需要の動向とどのような関係にあるのかを華北、華中の順で見よう。まず表7は日中戦争前の1934年度から43年度までの河北・山東・山西の華北3省における米穀の輸移入をその生産量と比較したものである。ただし1940年度以降はそれまで華北の移入米の大部分を占めた華中からの移入量は不明である。

同表によれば、生産と輸移入量が判明する1939年度までは、生産と輸移入量を合計する

と、概ね30万トン台で推移し、輸移入を比較すると、輸入よりも移入、すなわち華中からの供給に依存していることがわかる。また生産と移入を比較すると、両者はほぼ拮抗している。

ところが、戦争の開始とともに移入量は戦前の約40%にまで落ち込み、生産量も39年度には前年の半分の7万トンに減少し、40・41年度にはいったんは10万トン台に回復するが、42年度からは再度落ち込み、43年度はわずか7万トンに激減する。

また外米の輸入は、40年度にピークを記録した後、生産と同様急激な落ち込みを見せている。1940年度以降の移入量は資料不足のために不明であるが、34-39年度の趨勢から推測すると、5万トンを維持するのは不可能であろう。

次に、表8は日中戦争前後の華北で、日本人と中国人の米穀消費量がどのように変化したのかを示している。戦争の進展によって華北で日本人人口が急増し、その米穀消費量は戦前の3倍に増加し、しかも1人当たりの消費量も戦前と同じ水準を維持している。またこうした日本人の米穀需要を満たすために日本から6万トンもの米が輸入されている。これに対して、中国人の米穀消費は漸減し、飯米消費は、21万4千トンから17万トンへと2割の減少を見ている。

ここで、当時の華北における米穀生産量を他の主要農産物と比較すると(表9)、小麦や高粱、粟、玉蜀黍等の雑穀よりも格段に少ない。また小麦と高粱は44年度になってもそれほど生産量は減少せず、粟はむしろ増加している。これに対して水稻は44年度にわずか9万5千トンにその生産量を落としている。このことは、おそらく華北の農民や都市の市民は米ではなく、小麦や雑穀を主食としており、戦争の長期化による農村の荒廃の影響を水稻が真っ先に受けたことを示しているであろう。

表10 1943年度の上海の米穀需給

(1,000トン)	
民需	282
在留邦人	17
重要産業中国人従事者	17
上海地区国策会社	5
工業鉞山	4
日鉄大冶	4
委任軍管理工場	2
その他とも需要計	328
地場供給米	145
軍放出	110
糧食委員会	35
外米輸入	183
供給計	328

出所：「上海米需給ニ関スル件 18米穀年度」  
 (『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国经济政策関係雑件  
 食糧需給対策関係』第2巻 B08060396200)

元来、華北においては、米作は地勢及び気候の関係上発達せず、住民は一般に雑穀及び小麦粉を主食とし、米食は都会居住者の中流以上の住民に限られていたとされる。またこれらの米穀需要の大部分は中南支及びビルマ米や仏印米と僅少な朝鮮米と現地生産米によって賄われていた<sup>(4)</sup>。したがって、戦争の進展とともに増加する華北の米穀需要、特にその増加分は日本軍の展開に伴って現地に進出する日本人向けのものであったといえる。そして表1-1で見られた1938-40年度の華北における外米輸入の急増は、これらの日本人向けに行なわれたものであろう。

これに対して、表10は1943年度の上海の米穀需給を示したものである。33万トンの需給のうち、中国人用の民需が圧倒的であるのはいうまでもないが、上海地区の国策会社、工業・鉞山、日鉄大冶鉄山等に従事する中国人に対しても在留邦人と同量の米穀が割り当てられている。また供給面では、収買による地場買付け米よりも外米輸入量が多く、この時点でも南方米の重要性が看取できるが(輸入量が表5の3倍となっているが、その理由は不明。原資料が需給計画を表しているのかもしれない)、輸入のための船腹の確保はますます困難となり、「租界ノ人口疎散工作ノ徹

表11 1944-45年度の華北・華中の米穀需給計画

(1,000トン)		
	1944	1945
邦人混用米	69	64
原料	3	
繰越		5
華北需要 計	72	69
現地収買	29	35
輸移入	30	29
繰越	12	5
華北供給 計	72	69
上海南京等主要都市民需	323	226
軍需	200	220
在留邦人	18	15
重要産業中国人従事者	28	86
華中需要 計	630	547
現地収買	500	547
小麦代用	80	…
輸入外米	50	…
華中供給 計	630	547

出所：「19年度華北食糧需給計画」「20年度華北食糧需給計画」  
 「19年度中支食糧需給計画」「20年度中支食糧需給計画」  
 (『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国经济政策関係雑件  
 食糧需給対策関係』第3巻 B08060396700 B08060396800)

底、消費規正の励行等ニヨリ極力外米期待量ヲ減少<sup>(5)</sup>」することが求められた。

最後に、表11によって戦争末期の華北と華中での米穀需給計画を見よう。まず華北の需要では、邦人用の混食米がほとんどを占め、これが現地の収買と輸移入によって賄われることになっている。そして同表の輸移入3万トン(44年度)、2万9千トン(45年度)は、表6の北支における米穀輸移入量と同じであり、南洋米の輸入と華中からの米穀移入がほとんど途絶するこの時点で、華北への米穀供給は日本が担わざるを得なくなっている。

一方、華中においては、総需要の半量をしめる民需の他に、44・45年度とも20万トンもの軍需米が計上され、これらを現地収買米が賄うということになっている<sup>(6)</sup>。ただこの現地収買米の1942・43年度の計画量47万トン、63万トンに対してその実績は25万トン、24万9千トンにとどまり<sup>(7)</sup>、同表の44年度の収買計画量50万トンはその半量が収買できれば上出来であろう。だとすれば、都市民需の切り下げは不可避となり、当然過酷な食糧不足が現出することは疑いない。

これより少し前の1940年度における中支全

表12-1 小麦・小麦粉の輸出入量 (1,000トン)

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
北支	小麦	輸出 0	0	5	3	2	1	0	0	0
	輸入	86	121	16	26	5	13	0	44	15
中支	小麦	輸出 0	2	7	5	28	5	5	24	4
	輸入	818	950	446	494	110	29	0	422	133
南支	小麦	輸出 0	0	0	0	0	0	-	-	-
	輸入	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	小麦	輸出 0	2	12	8	30	6	5	24	4
	輸入	905	1,071	464	520	116	43	0	467	148
	小麦粉	輸出 25	39	6	0	9	1	7	67	20
	輸入	333	195	59	51	31	30	254	357	320

表12-2 小麦・小麦粉の地域別輸入量 (1,000トン)

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
豪州	小麦	553	839	43	406	96	43	-	298	106
	小麦粉	93	11	18	11	14	113	171	113	-
カナダ	小麦	164	97	8	1	3	-	-	0	-
	小麦粉	7	10	13	11	7	7	9	3	-
米国	小麦	179	0	308	4	0	0	-	167	42
	小麦粉	60	35	17	3	7	17	143	80	-
アルゼンチン	小麦	-	134	97	105	-	-	-	-	-
日本	小麦粉	31	0	2	5	0	111	25	118	-
その他とも計	小麦	905	1,071	464	520	116	43	0	467	148
	小麦粉	333	195	59	51	31	30	254	357	320

表12-3 小麦・小麦粉の地域別輸出货量 (1,000トン)

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
日本	小麦	0	2	12	8	29	6	5	23	2
朝鮮	小麦	-	-	-	-	1	-	-	0	-
台湾	小麦	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	小麦粉	-	-	-	-	-	-	-	10	8
関東州	小麦粉	-	39	5	-	6	0	7	45	11
その他とも計	小麦	0	2	12	8	30	6	5	23	4
	小麦粉	25	39	6	0	9	1	7	63	20

出所：「小麦移動高調」「小麦粉移動調」

(『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国经济政策関係雑件食糧需給対策関係』第3巻 B08060396900)

(備考)

1932年の小麦粉の地域別輸入量は原資料で空欄。

軍の所要米は年間約10万トン（1トン＝約7石）であり<sup>8)</sup>、日本の粳米と同様の品質をもつ米を生産する蘇州を中心とする「三角地帯」から「現地自活」用に調達された。その他に、南京上流の「蕪湖米」が軍需用として約7万トン調達され、①軍の補給米、②「三角地帯」産出米10万トンの代替米、③軍票交換用米、④補給廠及び停泊場等の常備苦力の飯米、⑤その他宣撫治安維持用米、として使用された。

さらにこの「蕪湖米」は、従来から都市の食糧米の大部分を占め、出回り量も多く価格も割安であった。そのため、日本軍は1939年10月以降国民政府に「民食米ノ調弁配給」を

移管し、同時に軍用米も同政府によって「調弁提供」させることにしたが、国民政府が41年1月末までに日本軍に提供することになっていた「蕪湖米」3万トンは、納入期限になっても1,800トンしか集まらなかった。それにもかかわらず日本軍は「積極的ニ国民政府ニ指導協力ヲ与ヘ」て、傀儡政権による軍用米の調達を図った。

また軍は、上述の「現地自活」用の軍用米10万トンとは別に10万トンを日本、北・南支に供給していたが、軍用米の調達を国民政府に移管すると調達量はそれ以前の10分の3に激減し、残りの7万トンを日本からの供給に

表13-1 雑穀の輸出入量 (1,000トン)

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
北支	輸出	0	0	6	87	46	3	0	0	-
	輸入	0	6	10	0	3	0	222	317	143
中支	輸出	0	0	4	10	0	19	0	0	0
	輸入	1	1	3	1	1	0	1	1	33
南支	輸出	0	0	0	0	0	0	-	0	0
	輸入	1	1	0	1	1	1	1	0	0
計	輸出	0	0	11	97	55	25	1	0	0
	輸入	3	9	15	3	5	2	224	318	177

表13-2 雑穀の地域別輸入量 (1,000トン)

	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
日本		0	0	0	0	0	17	1	12
朝鮮		0	0	-	-	-	0	3	0
関東州		6	12	0	3	0	200	312	112
その他とも計	3	9	15	3	5	2	224	318	177

表13-3 雑穀の地域別輸出量 (1,000トン)

	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940
日本	0	0	10	42	32	20	1	0	0
朝鮮	0	0	0	49	22	4	-	-	-
関東州	0	0	-	1	0	0	0	0	0
その他とも計	0	0	11	97	54	25	1	0	0

出所：「雑穀移動調」

(『大東亜戦争中ノ帝國ノ对中国經濟政策関係雑件食糧需給対策関係』第3巻 B08060396900)  
(備考)

1932年度の輸出入の内訳は原資料で空欄。

期待せざるを得ず、日本と北・南支に供給していた10万トンも困難になると予測していた。

## 2. 小麦・小麦粉・雑穀

表12-1~3が表1-1~3と同様、日中戦争前後から太平洋戦争が始まるまでの中国の小麦と小麦粉の輸移入量を示している。

第1に、小麦・小麦粉とも輸入が圧倒的で、輸出は微々たるものである。それでも小麦は少量とはいえ中支から日本へ輸出され、小麦粉は1939・40年の2年間ではあるが、中支から関東州(満州)向けに輸出されている。

第2に、小麦と小麦粉の輸入量を比較すると、小麦の方が圧倒的に多い。小麦の輸入先は豪州、カナダ、米国、そしてアルゼンチンであるが、中でも豪州が最大の小麦の輸入相手国である。ただし、これらの国々からの小麦の輸入は、1936年でいったんは止まり、39

年から豪州と米国から再度大量の輸入が始まる。

小麦粉は1933年で輸入が一段落し、その後38年から再び豪州、米国に加えて日本からの輸入が増加する。先の表1-2によれば、日本は当該期から中国に米穀を供給したが、加えて小麦粉も中国に輸出することになる。

第3に、中国内の輸入地域は、小麦は中支が圧倒的であるのに対して、小麦粉は中支に限らず北支と南支もある程度を輸入している。また、北支の小麦粉輸入は1937年まではそれほど量の量ではなかったが、1938年から40年にかけて豪州、米国、日本から大量に輸入されている。

続いて表13-1~3は雑穀の輸出入とその地域別の輸出入先を示す。輸出力は少なく、日中戦争以前に北支から日本向けに2~4万トンが輸出されていたにすぎない。ところが、戦争勃発とともに北支からの輸出は皆無とな

表14 中支の小麦粉輸移出量 (1942・1943)

(1,000トン)

	1942年1月-10月	1943穀物年度
北支	83	132
満州	16	30
南支	16	-
蒙疆	8	-

出所：興亜院華中連絡部「小麦及小麦粉ニ関スル対策要綱 昭和17年1月29日」  
 「中支小麦粉需給計画」  
 (『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件 食糧需給対策関係』第2巻 B08060395700 B080603396200)

表15 小麦粉と雑穀の輸移出・輸移入計画 (1,000トン)

		1944		1945	
小麦粉	北支	輸移出	-	-	-
		輸移入	130 (中支126 日本4)	80 (中支80)	
	中支	輸移出	148 (北支114 満州20)	106 (北支80 満州16)	
		輸移入	-	-	
雑穀	北支	輸移出	-	-	-
		輸移入	430 (満州350 蒙疆80)	566 (満州398 蒙疆80)	
	中支	輸移出	-	9 (日本6 南支3)	
		輸移入	-	-	

出所：「19年度華北食糧需給計画」「20年度北支食糧需給計画」「19年度中支食糧需給計画」「20年度中支食糧需給計画」「19年度蒙疆食糧需給計画」「20年度蒙疆食糧需給計画」  
 (『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件 食糧需給対策関係』第3巻 B08060396700 B08060396800)

(備考)

①原資料では、中支と蒙疆の「小麦粉」の単位は1000袋であるので、1袋=20kgで1000トンに換算した。

②1945年の北支への米穀輸移入29千トンの内訳は原資料で記載なし。

り、代わって関東州(満州)から北支向けの雑穀が急激に増加する。

輸出入の他に、中国の各地域での移出入はどうなっていたかを小麦粉及び雑穀について示したのが表14と表15である。

まず表14は、アジア太平洋戦争開戦後の1942年と翌43年の中支から各地への小麦粉の移出量である。42年は北支と満州、南支に移出が行なわれていたが、43年度になると中支の小麦粉はそのほとんどが北支に送られている。

また表15は戦争末期の小麦と雑穀の輸移出入計画を示すが、やはり中支が移出の中心となり、その大部分は北支と満州に向けられている。また雑穀は、表13-1・2でみた満州から北支の輸入がそのまま継続し、それに加えて蒙疆からの輸入も継続されている。

1941年以降の小麦の輸入と移出入について

は、資料不足で確かなことは不明であるが、この時点でも中支から北支へと小麦粉の移出が計画されていることを考えれば、豪州等からの輸入が途絶えた場合、中支で生産された小麦を上海等で小麦粉に加工して北支に移出していたと推測できる。

総じて小麦粉については、中支が生産の中心地であり、相当量が北支へ移出されていたことが判明したが、中支での需要=消費の計画を見たのが表16(1942年)と表17(1943年)である。民食用の需要が最大であるのはいうまでもないが、炭鉱や鉄山等の生産力拡充のための重要産業にも手厚い割当が計画されている。また北支や満州向けも相当な量に上り、42年の400万袋、43年の660万袋は各年度の上海の都市需要を凌駕している。また表17の需給計画では、工場別の供給量が示され、

表16 中支小麦粉需給計画(1942年1月～10月)

(1,000袋)

上海周辺	3,667
南京・無錫等	2,649
奥地都市	2,296
重要産業関係	398
米食代用	1,250
武漢地区	750
輸移出	6,210
北支	4,166
満州	833
蒙疆	411
南支	800
持越	1,501
需要計	18,721
生産量	17,160
持越	1,561
供給計	18,721

出所：興亜院華中連絡部「小麦及小麦粉ニ関スル対策要綱」  
(昭和17年1月29日) (『大東亜戦争中ノ帝国ノ対  
中国経済政策関係雑件食糧需給対策関係』第2巻  
B08060395700)

表17 中支小麦粉需給計画 (1943年度)

(1,000袋)

上海地域	5,563
南京等奥地諸都市	5,150
武漢地区	900
重要産業特殊配給	468
淮南炭鉱	360
大冶鉱山	108
輸移出	9,600
北支	6,600
満州	1,500
持越	796
需要計	22,477
日本人工場	17,546
租界内工場	1,530
奥地中国人工場	1,909
持越	2,000
供給計	22,985

出所：「中支小麦粉需給計画」  
(『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件  
食糧需給対策関係』第2巻 B08060396200)

日本人工場が小麦粉供給の大部分を占めている。

最後に、表18と表19は1944年度と45年度の華北と華中における小麦粉と雑穀の需給計画である。まず華北では、小麦粉の需要はほと

表18 1944 - 45年度の華北における小麦粉と雑穀の需給計画

(小麦粉：1,000袋 雑穀：1,000トン)

	1944		1945
	小麦粉	雑穀	小麦粉・雑穀
軍需	25	129	158
邦人米混用	-	9	10
中国人用		577	615
開発関係		350	420
米作		30	35
棉作		60	50
特配		82	110
繰越		55	100
需要計	25	715	933
繰越		36	167
市場収買	25	120	200
輸移入	130	430	566
蒙疆		80	80
中支	126		88
満州		350	398
日本	4		
供給計	155	585	933

出所：「19年度華北食糧需給計画」  
(『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件  
食糧需給対策関係』第3巻 B08060396700)

表19 1944-45年度の中支における小麦粉と雑穀の需給計画

(小麦粉：1,000袋・雑穀：1,000トン)

	1944年度	1945年度	1945年度
	小麦粉		雑穀
軍需	180	1,370	27
日本人用		54	3
中国人用	10,571	5,203	28
軍警・官用		187	
上海・南京民需		4,236	
重要産業		720	28
原料		60	
輸移出	7,475	5,300	9
北支	5,700	4,000	
蒙疆	300	200	
満州	1,000	800	
南支	475	300	3
日本			6
繰越	500	1,117	
需要計	18,726	13,044	67
繰越	-	1,117	
地場収買	18,726	11,927	67
輸移入	-	-	
供給計	18,726	13,044	67

出所：「19年度中支食糧需給計画」「20年度中支食糧需給計画」  
(『大東亜戦争中ノ帝国ノ対中国経済政策関係雑件  
食糧需給対策関係』第3巻 B08060396700 B  
08060396800)

んどなく、満州からの雑穀が需要を賄っている。軍需も小麦粉よりも雑穀の方が多い。また雑穀は開発関係の工場や鉱山に従事する中国人にも配給されている。こうした需要のあ

りかたは華中でも同様で、地場収買された小麦粉は、その半分が北支等の中国各地に送られ、残りが民食用と軍需、そして重要産業へと配給された。

## おわりに

日中戦争以前の中国は、タイと仏印から大量の米穀を輸入していたが、戦争の勃発とともに華北以外はその輸入は激減した。また小麦・小麦粉も、戦前は豪州や米国からの輸入に依存していたが、戦争とともにいったんは輸入が減少するものの、再度輸入が増加する。しかし、太平洋戦争の開始とともに輸入が途絶し、さらに船腹事情が悪化して、南方米の輸入も困難になると、従来華中からの米穀移入に依存していた華北は、日本からの輸入に期待せざるを得なくなった。また米穀生産そのものも激減していく。

戦争の進展とともに、華中は、日本軍の現地自活のための軍需米を供給し、小麦粉も大量に華北へ移出していた。しかしそれでも華北の穀物需給は逼迫し、満州からの雑穀が軍需と民間消費を賄うことになったのである。

の円滑な穀物移動が停滞したこと、④その結果、華北では日本からの小麦粉輸入に依存せざるを得なくなったこと、などが指摘されている。本稿は、この研究に大きく依存しつつ、中国の占領地内の穀物生産と需給関係をもう少し詳しく論じた。

- (3) 興亜院華北連絡部「華北ニ於ケル米穀調査 昭和十五年二月十九日」アジア歴史資料センター資料 B06050462300
- (4) 前掲「華北ニ於ケル米穀調査」。
- (5) 「上海ニ於ケル食糧問題ニ関スル件 昭和17年6月23日」C04123797900
- (6) 日中戦争期以降の軍需米に関しては、『日本帝国主義史』3（第2次大戦期）の「第8章 食糧生産と農地改革」が、戦時の主要食糧の需給動向を検討している。その第1表（同書、333頁）で、軍需米の需要量が示されているが、1941米穀年度以降の数値であり、それ以前は空欄になっている（原表は、内村良英「わが国食糧需給の構成について」1950年、及び『農林行政史』1959年）。満州事変期以降の軍需米調達に関する研究は今後の課題である。
- (7) 「糧食収買目標収買実績」（『大東亜戦争中の帝国の対中国経済政策関係雑件 食糧需給対策関係』第2巻 B08060396200）
- (8) 以下、軍需米に関する叙述は、「軍用米ノ調弁状況其他ニ関スル件通牒」（C04122829600）による。

- (1) 「華北分離工作」以降の中国における「傀儡政権」の財政構造（『北星論集』第50巻第2号 2011年3月）
- (2) こうした課題に直接関連する先行業績に、大豆生田稔「日本における対外依存的穀物需給構造の形成・展開・再編」（『農業史研究』第36号、2002年）がある。同論考は、1920年代後半から30年代にかけての日本の穀物需給を、満州、朝鮮、台湾、中国、東南アジアを含んだ東アジア全体の穀物貿易の中でとらえたスケールの大きな議論を行なっている。そのなかで、中国の穀物貿易は、①華中から中国各地への沿岸貿易による米穀移出と並んで、東南アジアからの米穀輸入が活発化したこと、②1930年代から豪州からの小麦輸入が激増したこと、③日中戦争により華北、華中、華南

[Abstract]

## Supply and Demand of Provisions by the Japanese Army in Occupied China After the Japanese-Chinese War

Hirokazu HIRAI

Beginning in 1937, before the Japanese-Chinese War, China imported rice from Indochina and Thailand, but these imports decreased after the war except in northern China. Wheat and wheat flour imported from Australia and the U.S.A, also decreased during the war, and then recovered. When the Asia-Pacific War, started in 1941, imports of wheat and wheat flour to China, which was occupied by the Japanese Army, stopped because Japan declared war on the Allied Powers. Rice imports also decreased due to lack of Japanese transport ships caused by the attacks of U.S. submarines. In addition production of rice in China decreased rapidly. During the shortage of provisions in occupied China, the agricultural area of middle China, around Shanghai and Nanjing (Katyu), supplied rice and wheat flour to northern China (Kahoku) and material rice for Japanese Army. But the shortage of provisions in northern China continued. Grain produced in Manchuria covered the shortage.